

新世代に聞く! 私たちのWell-being

大学教育への期待
 学生が、大学のコミュニティだけにとどまらず、日本全国、あるいは世界の各地域に飛び出してさまざまな人と出会い、視野を広げることができるよう、どんどん後押ししてあげてほしいです!



根岸 えま

ねぎえま ● 一般社団法人歓迎プロデュース理事。1991年生まれ。東京都出身。立教大学社会学部卒業。大学在学中に、東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県気仙沼市のボランティア活動に参加。2015年「一般社団法人まるオフィス」、2019年「一般社団法人歓迎プロデュース」の立ち上げに携わり、銭湯「鶴亀の湯」と「鶴亀食堂」をオープン。現在は沿岸漁業の担い手育成事業を行う。

地域支援事業 気仙沼を日本一漁師さんを大切に
 被災地の漁師の使命感に心を打たれ
 大学2年生だった2011年秋、宮城県気仙沼市で震災ボランティアの活動に参加したことが、私の人生を決定付けた。壊滅的な被害を受けて変わり果てた町で、漁業の復興に向けて使命感に燃える漁師さんたち。そのたくましく姿に心を強く揺さぶられたのです。
 休学してボランティアを続けたため、就活は1年遅れ。すでに働いている友人の話や、本音の「本当の幸せって?」「働くってどういふこと?」と自問する日々。悩んだ末に東京の企業の内定を辞退し、気仙沼で働くことに決めました。かっこいい漁師さんたちのそばで働くことが自分らしい生き方だと気づいたからです。
 2015年に気仙沼市に移住し、一般社団法人を仲間と共に立ち上げ、地域教

育や市から受託した移住定住促進事業を担いました。2019年には気仙沼の女性経営者2人と、「一般社団法人歓迎プロデュース」を設立し、銭湯と食堂をオープンさせました。これは「気仙沼を、漁師さんを日本一大切にしたい」という思いで実現させたものです。水揚げ後の憩いの場として、被災しながらも100年以上営業を続けた銭湯でしたが、防潮堤建設のために廃業となつてしまいました。そこでクラウドファンディングを実施し、開業につなげたのです。
自分で選択した生き方に迷いはない
 私の役目は、漁師さんたちの困り事を解決すること。気仙沼でも漁業後継者不足が深刻です。2020年から気仙沼市と共に漁師さんと新たな担い手をつないで、若手漁師を育成する「気仙沼市沿岸

漁業担い手対策支援事業」をスタートさせています。
 現在は、新人漁師の活動をウェブで発信したり、漁師に関心がある人向けの研修を調整したりしています。収入が保証されているわけでもありません。自ら事業をつくらなければ何も動かせず、未来は常に不透明です。それでも、自分で決めて始めた事業であり、やりたいことをできているので、迷いや不安はありません。
 一人が辞めても穴埋めする誰かがいる企業とは違い、気仙沼では一人ひとりが主役でプレイヤー。この町で、替わりの効かない存在として働けることにやりがいを感じています。実は私には大きな夢や目標はありません。その時々「これやってみたい!」という心の声に従っています。

HTech学生起業

大学の研究とビジネスの間にシナジーを

起業のきっかけは友人の就活うつ
 私は、新卒採用に関するサービスを提供する株式会社ABA(アバ)を、大学4年次に創業しました。起業のきっかけは、友人が就職活動をする中で、うつ病になってしまったことです。彼は第二志望の最終面接まで進んでいたものの、不採用になってしまい、憧れの企業に入社できなかっただけでなく、これまで費やしてきた労力や時間、費用が無駄になつたと感じ、日に日に元気を失っていきました。調べてみると、就活うつに陥る学生は少なからずいるとわかりました。最終面接で落とすことは、企業にとってもファンを、アンチに変えてしまうリスクがあるはず。「この状況は誰も幸せにならない!」—そう思った思いから解決策を模索し始めました。

ヒントを得るために、企業の人事担当者にはヒアリングをしました。すると、最終面接まで残る学生は皆、実力はあるものの、「企業文化と合わない」「景気悪化による採用枠の削減」といった理由で不採用になっていること、さらに「他社の最終面接まで通った学生は一定の能力が担保されているので、むしろ採用したい」といった企業の本音も見えてきたのです。そこで、「自社で採用できなかった学生を企業間で推薦し、同時に他社の最終まで進んだ学生をスカウトできるプラットフォーム」をリリース。月間スカウト数1200件を突破するまでに拡大しました。

仕事につながる学びを続ける
 ABAは、私にとって3つ目の事業です。最初の事業はクラウドファンディングで資金を集める段階で大失敗。アイデアを事業化する難しさを学び、貴重な経験をしました。ABAの創業にあたっては、初期費用を極力抑えるべく、「ノーコードでアプリを開発しました。起業後は神戸大学大学院に進学。今は岡山大学大学院へ移りました。周りからは「なぜ学生を続けるのか?」と尋ねられます。私にとって、学びは仕事につながるものです。学びたいという意欲はむしろ、大学の研究とビジネスの間にシナジーを生みたいという思いがあります。大学の研究室には高い専門性と技術がありますが、ビジネスの観点から希薄です。しかし、研究とビジネスをつなげることで、社会に役立つ何かを生み出せるはず。大学発ベンチャーはその最たるものであり、研究とビジネスとの懸け橋として、少しでも役立ちたいと思っています。

大学教育への期待
 理系でありながら別分野で起業した私の選択を、研究室の先生は尊重してくれました。学生の興味や思考は変わるもの。その時々に応じて、学生の挑戦を後押しする環境を提供していただきたいと思っています。



久保 駿貴

くぼしゅんき ● 株式会社ABA(アバ)代表取締役。1997年生まれ。兵庫県出身。2021年岡山大学理学部卒業後、神戸大学大学院海事科学研究科入学。同年9月に退学し、10月より岡山大学大学院に進学。岡山大学在学中に株式会社ABA創業。同サービスは経済産業大臣賞、SDGs日本賞、「金の卵発掘プロジェクト2021」審査員特別賞などを受賞し数々のメディアへも出演。全サービスをノーコードで開発したスタートアップとしても注目される。

*1 人事・人材(Human Resources)と技術(Technology)を掛け合わせた造語。人事の領域に革新をもたらす技術のこと
 *2 プログラミング言語でソースコードを記述せず、Webサービスやアプリなどのソフトウェアを開発すること

大学教育への期待
 大学は、何かに興味を持ち、探求していく、自分と向き合う場だと思います。大学教育は「生きる」という問いに直結するものだからこそ、学生にたくさんのチャンスを提供していただきたいです!



繫 奏太郎

つなぎそうたろう ● 株式会社STYZファンドレイザー。一般社団法人Earth Companyファンドレイザー。一般社団法人ELAB理事。1997年生まれ。創価大学在学中に株式会社STYZでインターンとして働き始め、卒業後、同社の正社員に。非営利団体を中心とした寄付金の調達、ブランディング、コンサルティングを行う。Earth Companyでは寄付金調達の支援、ELABではU25の社会人・学生を中心としたEGAKUプログラムの提供に携わっている。

ファンドレイザー

起業家の右腕として社会課題解決に寄与

資金調達はファン仕事
 私は、3つの組織に属し並行して仕事を多く、いわゆるパラレルワーカーです。中でも多くの時間を費やしているのは株式会社STYZでのファンドレイジング業務です。ファンドレイジングとは、非営利団体の運営資金を寄付という手段で調達すること。加えて支援団体の資金調達の際として、ブランディングやマーケティングも担当しています。これまで70団体の資金調達のため、約4000人の方から寄付を集めました。
 働き始めたころ、「ファンドレイジングは、新人アイドルを応援するファンに似ている!」と気づきました。アイドルグループの中で、特に応援しているメンバーを「推し」と言います。なぜ「推し」たくなるのかといえば、ステージ上でがんばる姿だけ

でなく、ブログ等を通じて日々の努力や葛藤を知り、自分も勇気づけられるから。同様に、社会課題に懸命に取り組む団体の思いや物語を伝えるしくみが実現できれば、団体を支援してくれる方が増えるのではないかと考え、団体の内側が見えるような情報発信を大切にしています。
1つの職場に縛られずに生きる
 高校時代から社会課題に関心があり、大学時代は自分で起業したいと考えていました。途上国の教育に興味を持ち、海外インターンシップも経験。そこで挫折を経験し、自分が本当にやりたいことを見つめ直した結果、今は起業家や団体を支える右腕になりたいと考えています。一方で「知らないことを知りたい」「社会課題の解決に携わりたい」という思いも実現するために、ほかの2つの会社にも籍を置いて

います。1つはインドネシアバリの社会起業家を支援するためのファンドレイジング。もう1つは、若者のためのアートワークショップを主催する社団法人です。複数の仕事を持つことで相互作用が生まれ、大きな成長につながると感じます。今は行政、非営利団体、民間企業、研究所、アイトなど、多様な分野のさまざまな人たちをつなぎ、社会課題を解決できる基盤をつくりたい。2021年7月、世界を代表する政治家、実業家が一堂に会し、世界経済と環境問題を討議する世界経済フォーラム(ダボス会議)の下部組織に、ファンドレイザーとして参加するということ、大変な機会を得ることができました。そうした場で、世界で活躍する人たちのつながりを築き、今後の取り組みに生かしていきます。

社会起業家

誰も解決していない課題に信念を持って取り組む

結婚・子育てを体験する「家族留学」
 私が、女性のキャリア支援をする任意団体「manma」を立ち上げたのは、大学1年生の時。「仕事を続けながら家庭を築きたい」。そう考える若い女性が多いのに、結婚や子育てにどのような喜びや苦勞があるかを知る機会がないまま、当事者になることも少なくありません。進学先選びや会社選びと同じように、結婚や子育てにおいても情報を広く集めたいという道を選べれば、より素敵な家族の形をつくれるのではないかと、そんな考えからmanmaを発足させたのです。
 設立当初は、家庭を持つ女性にヒアリングや座談会を行って、ウェブサイトで情報を発信していました。ある日、協力いただいた方から、「そんなに子育てに興味があるのなら、うちに来てみない?」と誘わ

れ、実際に子育て生活を1日体験。そこで初めて子育ての苦勞や楽しさの一端に触れることができました。「結婚や子育てのワンシーンを、学生や若者が経験できる機会がある」とよいのではないかと。そんな思いが生まれ、学生が子育て中の家庭の日常生活に1日参加し、生き方のロールモデルに出会う体験プログラム「家族留学」を事業として始めたのです。
社会課題解決のための新たな挑戦へ
 「家族留学」は多くの方の注目を集め、政府のさまざまな委員会に招かれる機会を得ました。内閣府の地域少子化対策重点推進交付金の検討会では、結婚や子育てを体験型で学ぶ意義を説明したところ、複数の自治体で「家族留学」を行うことになり、manmaのミッションを広めることにつながりました。

大学院修了後もmanmaの活動を続けてきましたが、2020年に代表を引き継ぎ、今は創業者として関わっています。現在の関心事は、どうしたら社会課題に取り組む人の声が政策に取り入れられるようになるか。そのため、社会課題の解決を実践する「シンク・アンド・ドゥ」タンクに興味を持っています。
 manmaを立ち上げる時、何人もの人から「就職して社会を知ってからのほうがいい」と助言がありました。そのほうがよい場合もあるでしょう。しかし、もし就職してからmanmaを始めたら、「家族留学」のアイデアは出てこなかったと思います。解決しなければならぬけれど、まだ誰も着手していない問題に、信念を持って取り組んだという経験が、自分を突き動かす大きな力になっています。

大学教育への期待
 4年間で卒業して、よい就職先を見つけるといった短期的な目標だけでなく、留学や休学中の経験などを通して、自ら「学ぶことの意義」を考える機会が、さらに広がることを期待しています。



新居 日南恵

におひなえ ● 株式会社manma創業者。1994年生まれ。東京都出身。慶應義塾大学法学部政治学科卒業後、同大学院システムデザイン・マネジメント研究科を修了。大学1年時の2014年に任意団体manmaを立ち上げ、2017年に株式会社化。外資系コンサルティングファーム勤務を経て、現在はクックパッド株式会社コーポレートブランディング部所属。

*3 課題解決の方法の提案に加え、自らその分野で活躍する実践家とネットワークを結び、アクションを起こしていく集団